

社会とのつながりを実感しながら自己に問いかけていく授業のあり方

指定校 2 年次 長野市立昭和小学校 砂塚雄太

I. 本校の新聞活用(NIE)の現状

本校はNIE研究の指定校となり2年目を迎えた。1年目に比べNIEに対する教職員の意識も高まり、新聞を活用した授業をいくつものクラスが行うようになってきた。特に高学年においては国語の教科書での扱いがあり、4年生は「新聞を作ろう」、5年生は「新聞を読もう」の単元において教科書を超えた独自の新聞活用の授業を行う姿が見られるようになった。また、低学年においても、どのような教科・領域で新聞を活用できるか試行錯誤する動きも現れてきた。そうした学校全体の新聞活用の高まりに応じて、高学年の廊下には「新聞コーナー」が設けられ、だれでもいつでもその日の新聞が見られるようにした。そこからは、児童は新聞が目止まれば興味・関心を示し、自ら関わっていくことが分かってきた。

4年生においては信濃毎日新聞社の出張授業を受け新聞の作り方についての学習を全クラスで行った。その中で「見出し」の付け方やリード文の位置づけ・意味などについての学習を行い、実際に運動会や社会見学の新聞作りを行った。5年生は国語の授業「新聞を読もう」から発展し、朝の時間に新聞記事を紹介し合うなどの活動も生まれている。また、3年生においては、自分たちのギリシャとの交流活動が新聞記事になったのを見て、新聞が身近にあることを実感することができると共に、国語の授業「海をかつとばせ」では新聞記事を活用して野球の知識を得ることができ、物語文の理解を深めることに役立てることができた。更に児童会の新聞掲示委員会では「ハッピーニュース」への取り組みを高学年に呼びかけるなど、児童が主人公になった取り組みも生まれてきている。

このように新聞を活用した学習活動の場面が広がりを見せ、「どのように新聞を活用できるのか」をいろいろな場面で考えるようになってきている。

II. 児童の姿と実践のねらい…育てたい児童の姿

<児童の姿>

本校の児童は大変明るく素直な子ども達である。課題が与えられるとそれに向かって一生懸命取り組む子ども達である。しかし、自ら課題を設定して自分なりの方法で問題解決に立ち向かう姿はまだ多くは見られない。「音楽」の場面での子ども達の姿を取り上げて考えてみると、全校の音楽集会「ドレミファタイム」では、体を使った音楽活動を全校が楽しむことができている。これは音楽を体に取り入れるということを一人一人が自らの体を使ってやってみよう感じてみようとしている姿そのものである。その結果、高音の素晴らしさや、リズム感を持った子ども達が育ってきている。しかし、音楽を感じ取った子ども達がそれを体全体で自分なりの表現を作り出す姿にはまだ至っていない。

自分の思いを表現につなげることができないその原因は何であろうか。日頃の授業においても自分の思いや考えが中心で、相手に分かるように話したり説明したり、相手の思いに寄り添って相手を分かろうとする姿にはなり得ていない。また、文章を読んだ自分のとらえ方や問

題をどう考えて解いたかなど、自分なりの分かり方を相手に分かるように表現することが苦手である。それは日頃の授業において自分なりに学習課題を持って問題解決に当たっていない、言い換えれば「問題解決に当たる」といった体験がまだまだ少ないからなのではないかと考える。それはやはり教師が学習問題を提示し子ども達自身が自分なりに学習課題を設定できるような学習環境づくりが不十分だからなのではないか、そこに授業改善の一つがあるのではないかと考えた。

そこで、そうした子ども達にN I Eの授業実践を通してのねらいを次のように設定した。

<実践のねらい>

- ①情報を整理して、相手意識を持って文章を書くことができる力…相手の存在を意識でき、相手に寄り添うことにより自分を振り返り自分を変容させていこうとする子ども
- ②新聞を読み自分の言葉で表現することを通して、資料などをまとめ自分の言葉で表現する力…自分がどのように分かっているのか、理解しているのか、自分の姿を明確にしようとする中で物事への理解を深め、自己を高めようとする子ども
- ③新聞を読むことにより社会とのつながりを実感し、社会の一員としての自分のあり方を問うていく力…関わりを自ら求め、人・物・事との関わりを自ら創り出し、関わりの中で自分の在り方を模索しながら生きていこうとする子ども

III 研究の概要

<ねらい①の授業実践> 4年・国語

1 単元名 「新聞を作ろう」新聞のとくちょうと作り方を知ろう

2 単元のねらい

運動会で初めての「霧の川中島」を踊った子どもたちが、この頑張りを誰かに伝えたいと願いを持った。国語で「新聞の特徴と作り方を知ろう」の単元があり、新聞を作ることを通して、自分の思いや考えを表現できるのではないかと考えた。新聞の特徴を考え、読む人がわかりやすい新聞を書くことをねらいとした。

3 学習のねらい

- ①経験したことを新聞記事にまとめる手順や方法を知る。
- ②読む人に伝えたいことを取捨選択し、新聞記事としての整理の仕方を工夫し、読み手に分かるような記事を書くことができる。

4 単元展開の概要

- ①新聞の実物を見て、記事や紙面の特徴を調べる。(第1時は、信毎読者センターの方に新聞の特徴や作り方などについて教えていただいた。)
- ②「運動会がんばったね新聞」新聞の作り方の手順に沿って割り付けなどを決める。
- ③読む人にわかりやすい文になるよう、大事なポイントをもとに記事を書く。
- ④友達の新聞を読んで、大事なポイントをもとに、こうするともっとわかりやすいというアドバイスを書く。
- ⑤読みやすい書き方をしている友達の新聞を見たり、友達からのアドバイスをもとにして、自分の新聞を書き直す。

- ⑥書き直す前の新聞と、完成した新聞とを、読みやすくなったか比べてみる。
- ⑦できあがった新聞を読み合ってお互い感想を言い合う。

5 成果と課題

- ①読者センターの方を招いての学習では、新聞の見出しやリード文の書き方など、新聞を学ぶことができ、人との関わりにおける表現の大切さに触れることができた。そのことは、一人一人の視点の広がりを生んでいく一助となったと言える。
- ②友達の新聞を読みアドバイスを書くことが、自分の新聞の表現や構成などを振り返る姿を生みだし、読み手に伝わる新聞を作り上げようとする意欲を生み出していた。それは、相手に寄り添って考える一人一人となっていた。
- ③「運動会新聞」ということで霧の川中島での頑張った自分の姿や、リレーで頑張った自分の姿があり、そのことを「伝えたい」という意欲を引き出すことができた。今後、伝えたい相手を広げることにより、更に自分の視点を広げようとする一人一人が生まれてくるものと考えている。

<ねらい②の授業実践> 5年・国語

- 1 単元名 「ハッピーニュースを書こう」
- 2 単元設定の理由

5年2組では、新聞に親しむために、毎朝当番が、関心があった記事を探してきて、朝の会で発表を続けてきた。そこで紹介される記事の内容は、その時々大きな事件・事故、スポーツの話題、季節の話題等が多かった。記事の発表の際、子どもたちが記事に対する感想や考えを発表するようにしているが、一言の感想で終わってしまうなど、表現の仕方になかなか工夫が見られなかった。そこで、児童会の新聞委員会が取り組んだハッピーニュースの募集の企画をきっかけに、ハッピーニュースを書くという視点で記事を集め、その記事に対して、自分がハッピーになった理由を整理してまとめていくことを通して、記事を深く読み取り、そこから感じた事をより多面的に表現することで表現力を高めていきたいと考えた。それにより、これからの新聞記事紹介に生かすことができ、新聞への興味・関心が一層高まっていくことを願い授業を構想した。

- 3 学習のねらい

ハッピーニュースを書くための記事を探してきた子どもたちが、ハッピーニュースの例や探してきた記事の見出しを見合っ感じた事を話し合うこと、写真・記事から感じた事をまとめることを通して、新聞を見直し、ハッピーになったわけを整理して、読む人が分かりやすいハッピーニュースを書くことができる。

- 4 展開の概要

- ①ハッピーニュースを紹介する書籍『心がぼかぼかするニュース』に載っていたハッピーニュースや児童会で募集したハッピーニュースを読み、ハッピーになった理由をどこから見つけているか話し合う。
- ②持ち寄った記事の見出しをカードに書いて紹介し合っ感じた事を発表し、見出しだけでもハッピーさが伝わってくることに気づく。

- ③見出し、写真、本文それぞれからハッピーだと感じた事を学習カードにまとめる。
- ④見出し、写真、記事それぞれから感じたことを整理して、読む人にわかりやすいハッピーニュースを書く。

5 成果と課題

- ①ハッピーニュースを書くという目的意識を持つことで、日頃どのように読み取り理解しているのかを自分で振り返ることができ、しっかり読みこむことで新たな気づきが生まれることに気づき、自分の分かり方をより確かなものにしようとする姿が見られた。
- ②ハッピーニュースを書くことにより、大きな事件・事故や自分の興味のある記事だけに目を向けていた子どもたちが、小さな記事の楽しい話題にも自ら関心を示すことが多くなり、様々な情報とのかかわりを自ら深めていこうとする姿が見られるようになった。
- ③見出し・写真・本文とそれぞれに視点をあてることを通して、より詳しく読み取り表現することを願ってきたが、その後の新聞紹介の際のコメントはまだまだ簡単な感想が多いため、それぞれの関係にまで関心を持たせることで、さらに豊かな表現が生まれてくるのではないかと考える。

<ねらい③の授業実践> 6年・総合的な学習の時間

- 1 単元名 「戦争について考える」
- 2 単元設定の理由

6年生になり、歴史の学習をしていく中で「人々はいつの時代も『平和な世の中』を求めている」ということに気がついた。児童は、人々の苦しみや不満が高まってくると時代が変わっていくことを学び、平和な世の中がずっと続くためには何をすればよいのか考えるようになっていった。そして、国語の単元『『平和』について考える』では、一人一人が平和について考え、更に友達のことを取り入れながら、グループで「平和についての意見文」を完成させスピーチをした。こうして、本学級の児童は『平和』の対極にある『戦争』について関心を高めていった。

そこで、総合的な学習の時間に、わたし達が今暮らしている世の中の「戦争に関すること」について学習することによって、児童が戦争や平和を、より身近なものとして捉えることができると思った。また、近隣諸国や関係の深い諸外国と、過去にどのような出来事があったのかを学ぶことで、世界の国々の関係性が見えてきて、国際理解が深まるのではないかと考えた。

新聞には「今、世の中で起こっていること」が載っている。毎日のように新しい情報を手に入れられるため、自分達が『今起きていること』に対して現実感を持って考えを深めていくことができるだろう。答えのあるテストのための勉強ではなく、『自分達で答えを導き出そうとする学習』ができ、一人一人が自分なりの考えを持つことができるだろう。そして、自分の考えをより確かなものにするために、教科で学習したことを生かしたり、友達と協同的に学習したりすることが必要になってくると考えた。また、日本が今後どのように外交を進め、「世界的に平和な世の中」に貢献できるかを考えるきっかけになるだろう。こうした児童の活動は、社会の一員としてのあり方を問うていくものであり、人・事・物との関わりを自ら創り出し、自分のあり方を模索しながら生きていこうとする力を養うものと考え、本単元を設定した。

3 単元のねらい

「戦争は絶対にやってはいけない」という思いを持っている児童が、戦争について調べたり、話し合ったりする活動を通して、戦争のない平和な世の中にするためにはどうしたら良いか自分なりの考えを深めることができる。

4 単元展開の概要

- ①シリア問題についての新聞記事を読み、戦争を回避するための方法を調べる。
- ②日本の戦争について調べ、戦争が起きた原因と結果について考える。
- ③日本の安全保障問題について調べ、これからの日本のあり方を話し合う。
- ④戦争のない平和な世の中にするためにすべきことを考え、発信していく。

5 授業の実際

(1) 主眼

戦争について学習してきた子ども達が、集団的自衛権の行使を認めるべきか考える場面で、対立する二人の意見が載った新聞記事を読み、「認める」「認めない」の二つの立場から意見を出し合うことを通して、平和に対する自分なりの考えを深めていくことができる。

(2) 展開

展開	学習活動	児童の反応	指導・評価
導入	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 【学習問題】 集団的自衛権の行使は認めるべきだろうか。 </div> 1. 自分の考えと友達 達の考えを確認する	<u>認める</u> 「日本だけ助けてもらっても互いに助け合って」 「仲間同士で協力すれば戦争防げる…」 「助け合った方がいい…」 「米国がやってくれと言ってるわけじゃない」 「日本も助けるとは言われていない」 「仲間同士しっかり組んでいるから戦争防げる」 「米国助けた方がいい」 <u>認めない</u> 「戦争したら命失う」 「武力より後方支援」 「助け合うこと大事、たくさんの命奪われることやだ」 「助け合うの大事、武力使わなくても、集団的自衛権認めなくても助けられる。その方が犠牲者も少ない」 アンケート結果を聞く 「えー！」驚きの声 配布された記事を見る 記事の大事なところにマーカーでライン なんで「容認しない」が大人は少なく、子どもは多いのか？ 日本・防衛力の増力、日米同盟の強化	・前時に持った自分の考えを振りかえさせる ・日経新聞の電子版アンケートの結果を見せる 「容認する」→ 82% 「容認しない」→ 18%

		米国は守ってくれとっているのか？ 米国はどう思っているのか？	
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p><学習課題> 集団的自衛権の行使を「認めるべき」か「認めないべき」か話し合ってみよう。</p> </div>	
展 開	2. 「認める」「認めない」理由について話し合う	<p>2班「認めるとわざわざ死者が出る」「費用もかかる。日本は戦争しないと決めた」</p> <p>W「戦争によって資金をえる。不景気になる」</p> <p>○「出兵は若者のみ」</p> <p>K「日本はずっと戦争をしていない。いきなり戦争しろと言ってもできない。戦争が大規模になってしまう」</p> <p>W「認めなくても後方支援の力が上。自分達で自分の国を守るくらい出来るから認めなくていい。自分の国守くらいの兵器持っている。集団的自衛権で、米国の支援して攻撃させる。自衛力高めたほうがいい」</p> <p>○「でもやっぱり認めないと米国で戦争が起こったら米国は平和でなくなる…助けなくていいのか？」</p> <p>W「物資支援で十分だろう」</p> <p>W「こっち不利になったら…米国不利になったら最初に日本人送るだろう」</p> <p>○「日本が危なくなったら助けてくれる」</p> <p>W「中国は経済大国で、中国と米国戦ったら、中国・北朝鮮攻められる…自衛力高めた方がいい。自国守れなかったら終わり！」</p> <p>○「資金、物資援助とか…」</p> <p>○「米国認めると言っている。日本が認めなかったら・米国は困るのではないか？」</p> <p>○「最後に犠牲になるのが日本人てことか」</p> <p>○「他人のことより自分のことと言うこと？」</p> <p>○「米国の立場は認めてもらったほうがいいの？」</p> <p>○「米国の条件…日本で戦争…」</p> <p>○「どちらも言えないな…」</p> <p>「戦争になるのは嫌だけど、アメリカや中国との関係を考えてと難しいなあ」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カードに記入 ・班ごとに意見交換をする
ま と め	3. 自分の考えをまとめ、感想・疑問を書く	<ul style="list-style-type: none"> ・認めると、日本がダメというか…認めないと米国が多分納得しないのでは…。 ・認めた方が国同士助け合う。認めないと日本は得！米国は？他の国の立場になると、逃げているみたい。支援など…もっと色々なこと考えていかなければいけない 	<p>日本はどのように世界平和に貢献すべきか考えさせる</p> <p>「平和のために優先させるべきものは何ですか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えをまとめさせる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・認めて戦争を起こしたらいけない。認めないと他の国に頼ってばかりで自分勝手ではないか。 ・戦争を引き起こしかねないからやっぱり認めない ・日本にまで被害がおよぶ。優先する一番は世界の平和 ・まずは日本！他国のこと考えられるならやればいい。 ・認めると戦争に参加しなくてはいけなくなる。 ・戦争になるってことは自分の夢が叶わなくなる。だから認めない ・認める認めないではなく、もっと世界が平和になることを考えた方がいいと思う。 ・大人の意見が聞きたい。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>資料や友達の見取り入れ、平和に対する自分なりの考えを深めている。</p> </div>
--	--	---

6 成果と課題

- ①集団的自衛権という児童にとって難しい問題でも、新聞記事を読み、調べ学習や話し合いの活動を繰り返すことで、「身近な問題」として真剣に考えられるようになった。
- ②日本の安全保障や外交問題に対して、「自分は何をすべきなのか。」「自分の未来のためにはどのように進むべきなのか。」を一人一人が今まで学習してきた知識や体験をもとに考えていた。また、新聞を通して社会とつながり、大人との意見の違いから自分なりの課題をみつけだせるようになってきた。
- ③児童は限られた知識や資料から自分の考えを深めていく。そのため、一つの資料の影響力が大きい。情報を取捨選択するための「メディアリテラシー」や、記事を批判的に読む「クリティカルリーディング」といった能力を高める必要がある。様々な資料や考え方から、多角的・多面的に社会事象を捉え、自分の見方や考え方を深めていくための支援はどうあるべきかを更に追究していく必要がある。

IV 研究のまとめ

本校では今年度「重点研究」として位置づけ、全学年から一人ずつ研究メンバーを選出し研究体制を整え、1年次の研究の成果と課題を元に研究を深めることができた。特に1年次は指定学級のみで行われていた研究から全学年がNIE研究にかかわることによって、まずは「なぜ新聞を教育活動にとりいれるのか」について十分論議することができ、「目的」ではなく「道具」「材料」として教育活動に十分活用できることを理解することが出来た。その上に立って「新聞で学ぶ」「新聞を学ぶ」「新聞を作る」ことがどのように各学年で取り入れることができるかを考え、実践することが出来た。

実践するに当たり、常に「どのようなねらいを持って新聞をとりいれるのか」が重要であることから、児童の実態に合わせて本校の「実践のねらい」を前述Ⅱのように3点にあたって設定することができた。そこでこの「ねらい」の3点に添ってどのような子どもたちを育てることが出来たのかをまとめてみた。

①情報を整理して、相手意識を持って文章を書くことが出来る力を育てる

⇒今まで国語の学習では説明文や感想文や記録文など色々な文章の書き方を学習してきた子どもたちである。どれも読み手はいるのであるが、あえて「情報を整理し、相手に伝わるよう

に」と「読み手」を意識して書くことは少なかった。今までは自分の思いのみで書いてきた子どもたちが相手を意識して情報を整理して文章を書いていく過程には、自分の視点だけでなく新たな視点を自分の中に取り入れていこうとする姿が生まれている。そこには自分中心であった子どもたちが「新聞を作る」という読み手を意識して書く体験を通して、色々な角度から物事を捉え視野を広げた自分に変容させていくことができた。

②新聞を読み自分の言葉で表現することを通して、資料などをまとめ自分の言葉で表現する力を育てる

⇒子どもたちが文章を読んだり人から話しを聞いたとき、自分では十分に分かっているつもりであるが、それを人に話したり文に書いてみようとしたとき、自分の理解の曖昧さに気付くことが多いものである。新聞を読み、自分が「どう感じたか」「どう読み取ったか」といった自分とのかかわりをそこに見いだしていく活動はまさに、自分の分かり方を自らに問うていく活動である。その過程の中では自分の理解の曖昧さにまず気付き明確にしていこうとする姿があり、そこに理解の深まりが生まれてる。そうした活動はこれから出会う様々な情報と自分とのかかわりを深めていくものであり、そこには自己の高まりが生まれている。

③新聞を読むことにより社会とのつながりを実感し、社会の一員としての自分の在り方を問うていく力を育てる

⇒子どもたちが教室で学んだことが教室内だけに止まってしまうがちで、なかなか活用されず、生きた力になっていかないことが今日の教育の問題でもある。そうした中で子どもたちが新聞を読むことによって、教室では学べない・学ばないこと、日常では体験できないことに触れることができる。そうした間接的な体験を、自分が今まで学んできた知識をフル回転させながら理解しようとし、調べたり周りとの会話を生み出したりしながら、自らかかわりをそこに創り出していく。そのことにより、社会の様々な見方考え方や人々の生き様に会い、自分がそうした中でどのように考え生きていったらいいのかを自らに問うていく姿が生まれる。

授業実践を通してこうした児童の姿を育てることが出来るということが見えてきた。

V 今後の課題

実践はまだまだ始まったばかりで、これから全教科や各領域での実践が求められている。そして継続的に行う中で、発達段階に応じたカリキュラム作りなど全校が取り組めるような態勢作りが求められてくると言える。特に今後重視したいことは以下の通りである。

- ①国語では4年生における「新聞作り」では題材を十分吟味したり、読み手を明確にしたりした上で、相手に寄り添った新聞作りに取り組む。
- ②5年生では日常的な新聞とのかかわりの場を重視しながら、ハッピーニュースや新聞記事の紹介など一人一人にあった新聞とのかかわりの場を創っていく。
- ③6年生においては、国語や社会科等の教科や総合的な学習の時間で、学習のねらいに添って手軽に新聞を活用し、子どもたちとの日常的な新聞とのかかわりの場を創っていく。
- ④低学年における新聞活用の在り方を深め、広げていく。
- ⑤学校全体に日常的に新聞と触れ合える環境作りをしていく。
- ⑥こうした学年毎の取り組みをもとに、学校全体のカリキュラム作りを進める。